

暗い所にいた。目を覚ましたつもりだが、よく見えない。続いていた頭痛は治まっていく。いやに静かだ。騒々しい物音を伴なわなければ生活ができない上の階の住人は、どうしただろう。夫それでよくうなされた。

枕元から離れた所に置いてある目覚し時計を取りに行く。ために立ち上ると、違和感に気づく。家ではない。土の上に寝ていたのか、堅かたくて、ざらざらする。地面が薄茫うすぼんや味りとしている。私はどこにいるのだろう。

自殺した所まで迄は覚えていた。庖丁ほうちようで頸動脈けいどうみやくを切った。自殺を試こころみたことは何度もある。手が震え、何枚遺書を書いたか分らない。死に損ぞこなうたびに捨てた。新たに書いた。本当に死ぬ時は、強い決意があるので思うと思った。違った。勘違いがある丈だけだった。

私は分わかったように感じた。理想と自分の距離、世界と自分の距離、ずっと曖昧だったその距離が、仕事をし、少しずつ生きるたびに分わかっていくような気がした。勘違わいは、手の震えを糸わすかに鎮しずめた。

歩まこうかと思ったが、やめた。周まわりを見渡す。暗くらやみだが、息遣いきづかいが聞きえた気がした。そつと手を伸のばしてみる。ふれた。

「だれ」

私が言ったものか相手と言わったものか分わからない。震えた声だった。私かもしれなかった。相手は一步前いっぺんに出たらしく、顔が少し現あられた。かわいらしい顔をしたこどもだった。背は私より随分ずいぶん低い。金髪まきげの巻毛まきげで、黒い眼めをしていた。

「ぼくの名前を聞いたの」

こどもが言った。

「それともぼくの種類」

「どっちでもいい」

「アセビだよ。聞いたことぐらいはあると

思うけど」

私は「ああ」と言った。思い当らないものを、どことなく聞いたことがあるように振舞うのが私の癖だった。夫それでいて、相手が「本当に知ってるの」と疑うたがつても話はなしを掘り下げてもいいような余地を残すのも癖だった。

「なんで死んだの」

「なんでかな」

「まあなんでもいいんだけど。こう訊きくのが決きまりなんだ。色々な人がいるけどさ、何億人と聞いてると、どんな言葉もいつか陳腐になるんだ。最近多いのは『うっだから』かな。時代の流れていうのが、あるみたいだね。

それもいつか飽あきられる」

私は頷うなずいた。そう言われると、理由を言うのが憚はばかられた。どうせ物珍ものめずらしい理由でもない。私はこのこどもに陳腐と言われることを恐れた。私の自尊心と虚栄心とは、死んでもなお治らない。

「で、なんでなの」

「なんでもいいなら、聞かなくていいじゃないか。夫それに陳腐それだなんだと言それわれると話それしづらい」

「いや、夫それは一般論はなの話はなしだよ。夫々それぞれ事情それぞれがあるだろうから、夫々それぞれのことまでばかりしたりしない。教えてよ」

「人間が嫌いだからだよ」

「ふうん」

予期した通り、アセビは大した反応を示さなかった。だから人間がきらいだ。私は相手がどのような反応をしても不快に思うだろう。アセビは私を見上げた。

「じゃあ人から離れて暮くらしたりしなかったの」

「この国には所有権というものがある。戸籍もある。まともはどこかへ行って暮くらそうとするなら、誰かから土地を買わなければいけない。建物は？ あればいいが、なければ自分で作るか買かうかしなければならぬ。知識もないし金もない。前準備がいる。自給自足

をすることにしても、初めは土地を耕やし種を仕
入れ収穫し生きている限り続けなければなら
ない。しかし本当に死ぬ気になって逃げるの
であれば不法に住み着けばいいし日本に拘泥
の必要もない。おれが現代に生れて軟弱なせ
いだと言われれば夫迄だ」

「日本って国の名？」

「そうだ」

「現代って」

「おれが生きていた時代だ」

私は言っただろうかと思った。私とアセビで
は共有しているものがない。だから共有して
いる筈の前提を捨てなければならぬ。規模
の違いはあっても、そんなことは生きている
間から何度もあったじゃないか。

「ありがとう。じゃあ、行こうか」

「どこへ」

「旅だよ。案内しよう。ずっと続けてきた
ことだろう」

私はアセビに躓がって歩いた。暗やみには、

少しずつ目が慣れてきた。岩しかない山を歩いていっているような感じだ。

「川が、あるかと思っただけだ」

「川？」

「そう、おれの国では、そういう伝承がある。川を渡ると帰ってこれないってな」

アセビは笑った。

「いつだって、どこにも帰れないじゃないか」

私はその意味を考えた。

「そうかもしれない」

「時間が経過する、すぎていくものである以上取り返しなんていつでもつかない。だから一瞬一瞬を精一杯生きようっていうのがその現代の流行りなんだろう」

「よく知ってるな」

「話だけは聞くからね。それに肯定的な人もいるし、否定的な人もいる。どっち派かなんてのは大した問題じゃない筈^{はず}だけど、時として^{それ}夫が重要になるらしいね」

「肯定派は夢や希望を見ようと言い、絶望を乗り越えて進もうという。否定派は現実にはどうすることもできない壁もあり、何もかもを乗り越えようとするのでなく、地に足を着けて進もうという。或は進むことを拒否する。正確にはどっち派につくかということが重要なんじゃない、自分はこういう思想をもっている」と誰かにアピールすることが重要なんだ」

「きみはどっち派」

今度は私が笑った。

「否定派だよ。だから自殺した」

私達はしばらく黙々と歩いた。一年ぐらいは経ったかもしれない（あくまで私の感覚だが）朝もなければ、夜もない。私は聞いた。

「太陽は、光りはないのか」

「光り？」

「すべてを照らして、明るく、誰もが持ちたいと願う、或は卑屈の対象になる、まぶしいものだよ」

「そんなものはないよ。ここはずっとこうだ」

「ここには暗やみしかない」

「暗やみ？」

「光りの蔭かげに出来るもの、太陽が沈んだ後に来るもの、星が輝かがやく為ためのものだ。心にも暗やみがあつて、夫それで人は犯罪を犯す」

「そんなものはないよ。ここはずっとこうだ」

言われてみると、ここに来た当初は暗いと思つていたものが、今は明然はつきりと見える。なれるということだろう、人は在あらゆることに。ではなぜ私は自殺した、なぜ生きることになれなかった、なぜ下らない人間というものになれなかった、或あるいはこんなものだと諦あきらめなかった。自分も他人もこんなものだと見限ればよかつたじゃないか、しかし見限れば夫それこそ生きる意味なんてない。

アセビが立たち止どまつていたことに漸ようやく気付いた。一年ぐらい経たつていただろうか。私は

聞いた。

「なぜもう歩かないんだ」

「ついたからだよ」

「どこに」

「きみの記憶だ。原因と経過とを知る為ために」

「さつきからなぜ知らなきゃいけないんだ。

理由も経過も、死んだ後では過すぎたことじゃないか
いか」

「退屈だからだよ。ぼくの仲間には、原因を知ることで未来へ活いかせるなんていう奴もいるけどね。ぼくは人間なんて変かわりやしないと思ってる。文明が進もうと時代が変かわろうと同じことで悩み苦しみ死ぬ。君らの時代は随分便利になったようだけどね、知ってたかい、『便利』なもの、『必要』じゃないから便利なんて名前がつけられるんだよ」

「必要なものなんて今は殆ほとんどない」

「それも違ちがうと思うな。必要なものは昔むかしから大して変かわっていやしない。ものや情報が溢あれたから相対的に薄うすまって見えるだけだ

よ。人間が進化するのなんて何百万年も先のことで、少しの変化でぎゃあぎゃあ騒ぐのも愚かしい、しかしアセビのぼくが人間のことを兎や角言うのも可笑しいね、ぼくは他の受け売りを話すのが好きなもんだからつい、聞き飽きた説を失礼した」

アセビは手を前へ拡げた。

「さあ、これが君の来歴だ。解説してくれよ」

「解説って言ってもな……これがぼく？赤ん坊の頃の記憶なんてぼくらは普通ないんだよ。ああ、母さん若いな、父さんも。これは誰だろう、母さんの友達かな、見たことない」

「よく泣いてるね」

「他人のこどもみたいだな。とても自分という感じがしない。しかしああ火見たいに泣くと何だかむず痒いね。迷惑を掛けてすまないという気になる。ああ、もう一人生れたね。

あれは多分弟だよ。二歳下なんだ。なんだ、

可愛い顔してるな。ぼくはよちよち歩いて
物珍らしそうに見てる。うわ、叩いてるよ：
：思いつ切り怒られた。嫉妬かな、単に取扱
かいが分らなかつた丈かな。こう客観的に見
てもあれだね、弟の方が整った顔立をしてる。
小学生くらいでもわかるもんだな、この差は
年を重ねても変らなかつた、というより甚肌
しくなつたよ。弟はかっこ好くなつて小学生
にして彼女作つたりしてた。ぼくは冴えなく
て初恋だつて中学生の終り頃じゃないかな、
告白もしなかつたけれどもね。弟とは仲が好
かつたと思うよ、けんかばかりしてたし、
性格も顔も全然似てなかつたけど。でも弟が
中学生になつてから、俗に言う愚連ちやつ
てね。つまり、気性が荒くなつた、或は荒
く見せようとするようになったんだ。ぼくは
まじめで、他人と殴り合いの喧嘩もしたこと
がなかつたから、怖かつた。時々話すといつ
もの弟に戻ることがあつて、だから夫を信じ
て上げればよかつたんだ。或日友達に言われ

たよ。『お前の弟が夜バイク乗って走り回ってるの見たぞ』って。弟は中学生で、ぼくの国じゃ中学生じゃバイクは運転できないんだ。つまり不法に運転してることになる。ぼくは聞いても何もしなかった。『バイクは危ないからやめておけ』って一言でも言えば違ってたんじゃないかって、思うことがある。弟は中学三年の秋、事故を起して死んだ。ぼくは高校二年だね、大学受験を控えてて、ぼくの学校ではもうみんな受験に意識を向け始めてる時だった。母親は泣いたよ。『私のせいで』『私のせいで』って叫んで收拾がつかないくらいだった。父親は、割合に寡黙な人で、ほら、母親の背中をさすって上げてる。ぼくはご覧の通り突っ立ってるだけ、役立たずだよ。頭ん中じゃ『いやおれが悪かったんだ』って母親に言おうかそればかり考えてたんだ。言おうが言うまいがそんなことはどうだっていいんだよ。内容なんてどうだっていい。言っても、言わなくても、行動を起し

て、両親に寄り添ってやればよかったんだ。一緒に悲しみをただ吐き出せばよかったんだ。弟は、弟と、もっとたくさん話しをすればよかったんだ。ところで、これ、事故の現場は見れないの」

「君達が、自分以上のことを知れるかい」
「そうだね……ぼくは、それから、死ぬことを考えるようになった。当世風の肯定派なら弟の分まで生きようって奮起する所なのかもしれないね。夫については率直に自分の暗愚ぶりを認めるよ。段々人と距離を置くようになったのもこの頃だった。いや、素からある程度左右いう性格だったんだろうね、ぼくは親友や恩師なんてものができたことがなかった。夫は、現代の人間の質が大したものじゃないということもできるし、左も左も人間なんて下らない生き物だということもできるし、ぼくが頭を垂れて教えを乞わなかった、自分から心を披かなかった、ということもできると思う。理由なんて確定しないから、

何とでも言える訳さ。弟が死んで、ぼくは、こんな下らない人間に囲まれて、自分の下らなさを意識しながら、生きていくのかなと思つた。思うと勉強に身が入らなくなつた。夫はぼくの甘えだろうと思う。いい人間は一杯いるんだ。自分の理解を示したくていうんじゃないよ。いい人間は一杯いる、心底下らない、余す所なく下らない人間なんて存在しない。どんな人間にもいい所、感心すべき、学ぶべき点は必ずあるんだ。でも同時に、徹底的に、余す所なく完成された人間というものも存在しないじゃないか？ 出会っていないだけ、どうして自分が成ろうとしない、批判はあるだろうと思う。でも人間の可能性を信じ得るほど、人間としての正しさを目指して、高潔で、自分が君子だと、自他共に認める生き方をする人をぼくは知らない。弟が死ぬまでは、正しく生きなくちゃと、自分の愚劣さに、悩んで苦しみながらでも完成しなくちゃと進もうとしたんだどんなに遠くて困難で

も。でも人は死ぬじゃないか。野心があっても能力があっても人に好かれても下劣でも聖人でも死ぬじゃないか。それまでは勉強は修養の一つだと思ってたんだ。頭はよくなかったけれどもね。ねえ、死んでもなお虚栄心というものは残るもんだね。頭はよくないつて、謙遜の意味でも、実際に自分より頭がいい人なんて掃いて捨てる程いるってわかってる上でもいうけど、ぼくらはそう言いながらしかし最悪でもないって考えてるんだ。下には下がいるって、自分が人類で一番下ではないって、意識もせずに考えながら言うんだ。ぼくだけかな。自分が人類で一番下だなんて夫は夫で不遜だろう。でもそんな自分が一番下だと理解、浸透していかない謙遜が、果して謙遜と言えるだろうか？

話しが外れたね。続きを見よう。夫でぼくは勉強ができなくなつて、其意味が分らなくなつて、大学に落ちたんだ。ああ、あんな顔してたんだね。心の中ではもつと愕然としてい

た積りだったけど、意外に顔には出てないもんだな。でもご覧よ、何度も何度も自分の受験番号探してる、見落としじゃないかと思ってる。勉強に身が入らなくて、落ちても仕方ないよ、考えてた癖に本当に落ちると狼狽えるんだ。ぼくは、覚悟している積りで、実際に其覚悟していたことが襲ってくると狼狽えることが何度もあったよ。左んなのは覚悟と号べない。でもぼくは覚悟をしている積りだったんだね。この時も左右だった。

ぼくは浪人することになったけど、やっぱり集中できなかったよ。このままじゃ絶対に受からないし、親に申し訳なかったから、就職することにした。予備校のお金返しますからって話して、免してはもらったんだけど、母親が『車の運転をする仕事だけはやめてくれ』って泣くんだよ。弟のことがあってから、ぼくは母親のことだけは泣かせたくなかった。でも、高校しか卒業してない人間が働らくには車の免許ぐらいないとって後で分るん

だけどね。

ここから見えるかな。ああ、やっぱり、ぼくが持つてる求人広告見える？ ほら、『簡単な仕事です』とか『営業の仕事ではありません』とか書いてある。あれは募集している仕事の内容について書いた紙なんだけどさ、あれを見て不動産屋の事務か何かの仕事に応募したら、実際は営業だったんだ。詐欺みたいと言えば大袈裟^{おおげさ}だけど、入社して暫^{しば}らく経^たってから社長に聞いたら『今の時代軟弱な男が多いせいで、うちみたいな小さい会社が営業の募集^なにしても仲々^{なかなか}集まらないからね』って何^{なん}ともない顔で言^いってたよ。ぼくは、結果的には、営業の仕事ができて勉強^{べんきょう}すること沢山^{たくさん}あつて、しかも営業なんてどの仕事であらうと必要なことだから、結果的にはよかつたとは思^いうけど、嘘^{うそ}をついたこと、その上自分^{自分}を正当化^{せいとうか}して悪^{わる}びれないこと、社会^{社会}に出ればこんなものだろうなと思^いいながら嫌悪^{けんあく}感を消^くせなかつた。誰も正^{ただ}しく生きることに興味

なんてないんだ。

一人、尊敬できる先輩がいてね、ぼくは生れて初めて尊敬できる人に会えた気がしたよ。其会社は十人ちよつとの会社で、先輩は中堅ぐらいの位地に居ただけど、とにかく在らゆることに知識がある人で、役員とかから質問を受けるぐらいみんなから頼りにされてた。夫でいてそんなこと鼻に掛けずに、ぼくは不器用で頭が悪いから何度も何度も失敗して迷惑をかけたんだけど、『新人のうちは失敗するのが仕事だ。もつとどでかい失敗を持つてくるぐらいの気もちでやれ』って励ましてくれたりして、嬉しかった。

なんだか、こうして改ためて人に話したりすると、恐しく陳腐だね。よく聞く話だ。慣れて来て、時々仕事帰りに飲みに誘われるようになって、先輩は酔うと言ったよ。『失敗するのはいい、いいけど、どうして左うなつたのかの原因と、そうならないためにはどうしたらいいのか考えてみようか』言うこと

は尤もつともで、そうだな、こう言うとやっぱりぼくが悪いんだな、ただ言われて嫌な気もちになつたんだ。先輩は酔うと必ず、どんなに和やかな雰囲気でも『おれは人の失敗を気にしないけど』の一言で始めて飲みに行つた数人の部下を順じゆんぐりに面話めんわした。時々は怒つた。そうして怒つた時は必ず言つた。『おれは滅多に怒つたりはしないけど』

ぼくは尊敬できそうな人間が、仕事の上で尊敬できただけで、人間として尊敬できないことが嫌だつたんだね、今気づいた。先輩が何度も『失敗を気にしない』っていうのは、本当はすごく気にしているから言うんだって思えたことが、『滅多に怒らない』って、わざわざ、怒るたびに言うのが、自分は怒らない人間だけど今は例外的に怒っているって示すためだけに言っているように聞きえたことが、途轍とてつもなく不愉快だつたんだ。

仕事が優れていることと人間が優れていることは別なのね。ぼくは先輩にはどう逆立さかだち

しても勝てない。失敗から学べないなら、夫は本当の失敗になってしまいうってことも、分っている積りだ。でも、夫でも、ぼくは先輩に人間として優れていて欲しかったんだ、幻想を押しつけた。

友達に対しても、教師に対しても、上司に対しても、ぼくは尊敬し信頼し得なかった。死に対しては、無力を感じた。これらがぼくの些細な失望と失敗だ」

アセビは腕を拱いた。

「足りないな」

「何が」

「順にいこうか。まず友達だね。君は親友がいない、できたことがないと言ったね。でも親しくしてた友達はいたんだろう。例えば彼とか」

「日野君か。確かに、彼とは仲好くしてた。

中学生の時は本当に毎日一所にいたね」

「お互いの家に行って、よく語り合ってたみたいじゃないか。こういうのを親友って言

うんじゃないのかい」

「親友というものが、一所いっしょにいた時間とか、密度で決きまるとしたら、そう言えるかもしれない。でもぼくは彼を親友と感じたことはなかった、そう言った信頼をぼくは彼に置けなかった。これは当時のぼくの幼おきなさが原因だよ。ぼくは語り合いたかったんじゃない、誰かにぼくを信頼を、きいてもらいたかったんだ。だからぼくが彼を信頼しなかった様に、彼もぼくを信頼しなかったと思うよ」

「ぼくは色々な人間を見てきたから比較して言うんだけど、君は友達が多い方でもないが、決して少なくもない。ほら、よく遊んで、あんなに笑っているじゃないか」

「たしかに、少なくはなかったかもしれない。でもねえ、おかしいよ、中学生の時だけど、ぼくはぼくを含めた、友達みんなが、世間一般の人達に比べて特殊だと思ってたんだ。特別だと自惚うぬぼれてたんだよ。だからあんなに笑って、ほら、あれは得意の顔なんだよ。」

何も知らなかったから、自惚うぬぼれてしまったのかな。としを重ねて、少しずつ世界が広がるおどと、驚おどろいたよ。特別どころか、平凡な、むしろ、どちらかと言うと怠惰な人が集まっていたんだ、ぼくも含めてね。だから驚おどろいた……打衝シヨツクだったよ。自分も含めてなんだから。だから、彼らに就ついて言うことは特にないだ、不快にさせてしまうかもしれないけどね」

「あれは言わないのかい、『まあいい人なんだけどね』って。君達はよく、悪口こきおろした後あとに左右そやってフオローするじゃないか」

「いい人なのは当然のことだよ、先刻さつぎも言いったけど、判はんで押おした様な悪人あくじんは左右そいないよ。みんないい人達ひとたちだった、だから笑わらつてもいるんだ。でも信頼しんらいを置おけなかつた、口先くちばかりで自分の特殊性とくしゆせいを主張しやうしたり、当あたり前まえに自分を特別なものと見做みなしていたり、正しい人間人間になろうなんて考かんえている様ようには、見えなかつたんだ……拗ねじけたぼくの眼めには」

「彼は」

「ああ、Y君だね。彼のことは唯一好きだったよ。彼は他ほかの人にはない、没利害性を備えていたから、彼のことだけは、友達の中で唯一信頼した。他ほかの人はその様には彼を評価していなかったかもしれないけど、晩年、なんて言うかと老おいてもいないのに可笑おかしいね、死ぬ一年ぐらい前からはぼくが積極的に連絡を取ったのは彼ぐらいだよ。でもだから、彼にはぼくのことを見限かぎって欲ほしくなかった。ぼくは本当に傲慢で、愚かだね。自分が散々自尊心のもとで人を下らないと言って置おきながら、数かず少すくい信頼できる人には臆病おそになるんだ。だから彼には、何も蚊かもを打明うちあけることもできなかった。ぼくがこうなって彼はどう思うかな、『どうして何も言いってくれなかった』って思おもってくれるかな、ぼくは、何を、言いってるんだらうね」

「君は死んだんだよ。生なきている凡すべての人を裏切うって侮辱ぶじよくして死しんだんだ。その事を忘われちゃいけない。さて、次は、両親だね。両

親のことは、信頼できなかつた」

「両親には感謝の気もちしかないよ。生んでくれて、育ててくれて、感謝してる。母親が又『自分のせいだ』って泣いてる所を想像するのが一番怖いよ。ぼくは、自殺する様に生れ付いた訳でも、そういう環境にあつた訳でもなくて、ただ、自分で選んでそう育って仕舞つたんだって、左右思ってる。でも左様なのが母親に取って何の慰さめになるだろうね。父親にも、すごく感謝してる。育ててくれて、沢山の世話をしてくれて、有難うと言いたい。彼らが老いたら、もし介護が必要になったら、絶対に自分がする積りだったよ。沢山の恩を返したかった。恩どころか、悲しみを与えて、どうしてぼくは生れてきたんだろう」

「其答は生きてる内に見つけ出すべきだったね。うん？ 君は、あれ、何してるの」

「ああ、遺書を書いてるんだよ。死のうとしたことは、一度や二度じゃない。仕損なう度に破いて捨てたけど」

「君は、一人暮らし？」

「そう、就職して、二十歳の時に家を出たかな。死んだのが二十五だから、五年間か。」

あの家に五年も住んだのか」

「自殺を試みたのは一人暮らしをしてから？」

「そう、言われるとそうだね、死ぬことはずっと昔むかしから考えていた気がするけど、具體的ぐたいてきにどうやって死ぬかを考え出したのは実家を出てからかな。最初は睡眠薬で苦しむことなく死にたいなんてばかげたことも考えただけど、その内、自殺なんてばかげたことをするのなら、苦しんで、恐怖して死ぬと思うようになってやめた。手首を切ろうと初めてしたのは高校生の時だと思うけど、これは死に損そこなうことも多くて、しかも痕あとに残るのが嫌だから結局試しもしなかったな。電車に飛び込むのは、沢山たくさんの人の目に着いてしまうし、嘘か本当か賠償金たぐいが凄すこい額になるとも聞いて、やめた。車に飛び込むのも轢はねた人に非

常に不愉快を与えるだろうなあと思った。まあスピード違反のスポーツカーに当るの（あた）は一興かなあとも考えたけどね、車に轢かれるのは死ぬ要素としては不確定な所が多い気もしてね。事故死するにはどうしたらいいかと真剣に考えたよ。崖から足を滑らして落ちたらどうかとか、雪山で遭難してみようかとか：怖かった、死ぬのはとても怖かったよ。でも生き続けるのも怖いんだ」

「今日死ねない人間は明日生きるしかない。遺書にそう書いてるね」

「そう、書いて、ほら、捨てたね。のどを掻き筆（むし）ってる。傍（はた）から見ると滑稽（こっけい）だね。ばか丸出した。今日死ねない人間は明日生きるしかない、死に損なうたびにそう思って生きてきたよ。でも、最後まで、思い続けることはできなかつた」

「最後の遺書はなんて書いたんだい」

「ほら、あれだよ」

「何々、『執着して、期待して、長く生き

すぎた。命をのぼしてしまった。この拙筆を見ればわかるだろう。歪んでいる。どうしてそれに気がつかなかった。もっと早く死ぬべきだった。命をのぼしてしまった。少し遅く終った。ただそれだけのことだ』遺書だったら両親への感謝とか、謝罪とか、書き給えよ。だから自殺なんてするんだよ」

「言葉もない。両親のこととか、Y君のこととか、書こうと思ったんだけどね、書けばいましめ羈こわになる様な気もして……」

「夫それに、書いてない、言っていないことがまだあるだろう」

「何のこと」

「顔が強張こわばったじゃないか。分わかっているんだろう、恋人のことだよ」

「恋人」

「そうだ」

アセビは黙って私が言うのを待った。何年でも待ち続けるつもりだろう。私は言った。

「元、恋人だよ。言って置くけど、ぼくは

彼女が去ったから死んだ訳じゃない。彼女と、会えたから、今まで生き続けてきたんだ。精一杯生きるつもりだった。彼女が、ぼくの命をのばしてくれたんだ」

「出会いは」

「同じ職場だったんだよ。彼女は事務で、ぼくよりも先に入社していたから、分らないぼくに色々世話を焼いてくれた。年は一つ上だったな。優しい人だったよ。気も利いて、頼りになるし、どうしてぼくなんかを選んでくれたのかふしぎな位だった。三年くらいつき合ったかな、或日、けんかして、この所けんかが続いていて、或日、去って行ったよ。どうして思い出させる」

「隠し事はなしだよ。さて、じゃあ、彼女のことは信頼し、尊敬していたということでもいいのかな、人間として。正しく生き様とする一人の人間として」

「どうして意地の悪い聞き方をする。彼女は、普通の、女の子だよ。別に正しく生き様

としていた訳じゃない。でも、いい人間だった。生れ持った性質か、両親の影響か、多分其どっちもだと思うけど、単純に善良で、ぼくなんかより、ずっといい人間だった。だから好きだったんだ」

「今、生れ持った性質もあると言ったね。君はさつき、自分が自殺したのは自殺する様に生れ付いたからじゃあないと、だから両親の所為じゃあないと、そういう口振りで言っただけど、矛盾しているね。生れ持った性質は、其人間に影響を及ぼすの及ぼさないの、どっち」

「どうして、責めるんだよ。どうして死んでまで責められなきゃいけないんだよ。そんな矛盾いいじゃないか、矛盾なんて世界に溢れているじゃないか」

「世界に溢れていることと、君個人とは、別の話しだよ。そんなことも分らず生きてきたのか？ 君は恋人が命をのばしてくれたと言ったね、でも遺書には命をのばしてしまっ

たと書いてる。くれたのか、しまったのか、どっち」

「どっちもだよ！ 命をのぼしてしまったんだ、もっと早く終えていれば誰にも迷惑を懸けずに済んだ、命をのぼしてくれたんだ、生きていて、よかったと思えたんだよ。拗けたぼくでも思えたんだ、夫が嬉しかったんだよ」

「もっと早く終えていれば誰にも迷惑をかけずに済んだ？ 夫は具體的にいつ、何歳の時に死んでいればそんな奇跡みたいなことが起るんだい。君の遺體を見付けたのは誰だ？

君の血を掃除したのは誰だ。君に部屋を貸したのは誰だ。君を雇ってくれたのは誰だ。君と契約してくれたのは誰だ。そうか、仕事を始めるよりも前に、海にでも身を投げていれば誰にも迷惑がからなかったって言うんだね。でもその遺體がどこかへ流れ着いたら？ 山奥で遭難して其遺體を誰かが見付けたら？ 遺體が見付からなければ君の両親が

搜索願そうさくねがいを出すかもしれない。夫それに費ついやした警察官や御両親の労力は？ 心配は？ 死んでまで責められなきやいけない？ ふざけるなよ。死んだから責められるんだ、抛棄ほうきしたから責められるんだ。まあ、君の甘ったれが分わかつたから激げきするのはここまですておこう。ところで、今迄いままでの話はなしをまとめてみても、今一いまいちぼくには君が自殺する理由が分らないんだ。何もかもを打明うちあけられる訳じゃなくても、信頼している友達もいて、両親に感謝もして、命をのばしてくれた恋人も、去しって仕舞まつたにしろいて、もう一度死んだ理由を教えしてくれるかい」

「人間が嫌いだから」

「それは、数少ない彼らのことも本当は嫌いだったという解釈でいいの」

「そうじゃない、彼らは、多くの人間の中で、本当に数少かずすくない好すきになれた人達で、でも、本当は、左右そだよ、友達も同僚もそれ以外の人間が全員嫌いなんだ。仲が好よかろうと笑っ

ていようと関係ないんだ。嫌いなんだ憎んで
いるんだ知人も他人も関係ないんだ。醜みにくい
じゃないか。愚痴みぢと、不満みまんと、怒り、虚栄心、
自己主張、欺あざむき、人間の、違いから来る、
徹底的な不理解！ そうだよ、おれは、みん
ながおれじゃないからいらついでるんだ。一
番み醜みにくいのはおれだよ、だから誰も彼もが醜みに
くく見える。どうして正しく生きられない！
人間が嫌いなんだ、自分が嫌いなんだ、だか
ら殺した」

「君は過去の遺書で、自分を好きでいて上あ
げ様ようという君の時代の風潮を難なんじているね。
では、夫それに敗北したという解釈でいいのかな」
「死んだら負けだよ。おれはまちがってた」
私は項垂うなだれ、膝をついた。数少かずすくない好すきにな
れた人達に、ありがとうを一度、後はごめん
なさいをつぶやき続けた。鋭利な石が落ちて
いた。手に取りもう一度頸くびを切ろうとしたが、
皮膚ひふを破るあの恐怖と苦痛とを思い出し、そ
のまま何年もためらっていた。